

栃木県におけるイチゴの山上げ栽培に関する 地理学的考察

菊池 美千世

1. 研究の目的

栃木県の日光イチゴは、昭和25年の導入以来著しい伸びをみせ、昭和30年にわずか75tであった生産量は最盛期の昭和48年には280倍にあたる21000tに達し、全国一となった。これは他に例をみない程の成長ぶりといえよう。以来、現在まで全国一の座を保ってはいるが、作付面積は近年減少傾向にあり、昭和48年の1200haから966haと、最盛期の約8割程になっている。

こうした急速な発展と最近の減少傾向の要因を、栃木県の特徴的な作型である山上げ栽培を中心に、考察することを目的とする。

2. 研究の方法

農林業センサス、栃木県園芸特産課の資料、栃木県鹿沼農業改良普及所の資料等の統計によって、山上げ栽培を主とするイチゴ栽培の概要をとらえ、高冷地育苗圃でのイチゴ栽培農家からの聞きとりによって、山上げの具体的な現状を調査する。一方、イチゴの育苗に畑を貸している戦場ヶ原開拓、鶏頂山開拓で、土地利用調査と聞きとりを行い、山上げをどうとらえているか考察する。

3. 研究の結果

- ① 栃木県は冬季の気温こそ低いが多日照で水田も肥沃と、乾燥に弱いイチゴを水田裏作として栽培するのに、好適な自然条件を有していた。そこに麦・大麻に代わる収益性の高い換金作物としてイチゴが導入され、急速に県内に普及していった。
- ② イチゴ栽培が余りにも多くの労働時間を要すること、その割に資材の値上りと西南暖地の生産の伸びによって収益性が低くなったこと、等の理

由で後継者が不足し、栽培者の高齢化が進み、作付面積が減少している。

③ 山上げ栽培には、促成栽培の早芽分化促進をねらいとする山上げと、半促成栽培の休眠打破をねらいとするものがあり、後者は栃木県でダナー種を用いた早熟化による規模拡大を目的として、開発された作型である。山上げ栽培の普及に伴って、一戸当りのイチゴ作付面積の増加がみられ、山上げ栽培は株冷蔵栽培とともに、その目的である規模拡大に大きな役割を果たしたといえる。

④ 栃木県の主な高冷地育苗圃は戦場ヶ原と鶏頂山にあり、県南主産地からは片道2時間前後の距離である。そこで山上げ栽培の早期出荷、労力配分に便利、高品質、高価格といった利点は認めても、山上げは労力的に無理な場合も多い。従って高冷地までの距離により山上げ栽培の割合に差が生じ、高冷地に近い鹿沼地方の山上げ栽培の割合は著しく高い。県高冷地育苗圃の条件が少し劣るが、戦場ヶ原開拓と鶏頂山開拓は優劣つけがたく、イチゴ栽培者がどこを選ぶかを決める際にも、この距離が大きな要因となっている。

⑤ 戦場ヶ原開拓はダイコンの連作障害が出始めてから、年々イチゴ育苗圃が増加し、耕地の8割程が賃貸されている。鶏頂山開拓では各農家が1ha程イチゴに貸していたが、最近畑がいたむとしてイチゴに貸す面積を制限する農家も増えている。

⑥ イチゴ作付面積の減少とともに、栽培者の高齢化と促成用の麗紅の導入で、山上げ栽培の減少も著しい。しかし山上げ栽培は今後も続けられると思われ、イチゴ栽培の省力化、省資源のためにも、山上げせずに早期出荷、高品質となる新品種の育成が待たれている。